

「戦争と医の倫理」の検証を進める会の設立趣意書

最近の医学・医療の進歩発展は著しく、人類は新たな倫理的問題に直面しています。医学者・医師も自らの問題としてその解決を求められています。その取り組みに際しては、医学・医療のこれまでの歩みを真摯に振り返ることは不可欠です。特に日本の場合、日本の医学会・医師会がかつての戦争に加担したことや日本の医学者・医師が戦争中に、731 部隊や戦地等で行った「人体実験」「生体解剖」「生体手術練習」、九大捕虜解剖事件等の非人道的行為について、自ら真摯な検証を行い、その教訓を生かすことは欠かせません。

しかし、当時の資料の焼却、散逸と残された資料の「未公開」「隠蔽」のために、その全貌は未だに明らかではなく、検証は容易ではありません。731 部隊に関しては、当時日本を占領したGHQ(連合軍総司令部)は、関係した多くの医学者・医師に対する訊問をしましたが、研究成果を得るために戦争犯罪を不問とする取引をしました。このような経緯のなかで、日本の医学会・医師会では「真相は不明」「解決済み」あるいは「タブー」とされました。日本医師会は、1951 年の世界医師会加盟にあたり、「日本の医師を代表する日本医師会は此の機会に、戦時中に敵国人に対して行った暴行を非難し、また行われたと主張され、そして 2、3 の場合には実際行われたという患者の虐待行為をとがむ(日本医師会雑誌 第 26 巻、71 頁、1951 年)」と声明し、問題は解決済みとしてきました。これは、日本の医学者・医師の戦争中の行為を真摯に反省し、その後目指すべき人種差別の根絶、人権擁護を基調とした日本の医学・医療のあり方を示したものは、到底いえません。

こうして、戦時中の医学者・医師による非人道的行為に真摯に向き合い教訓を活かす取り組みがなされないまま、日本は 21 世紀を迎えました。「過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となる(ワイツゼッカー、1985 年)」という歴史の教訓に学び、かつての戦争中における医学者・医師の非人道的行為について、史実を明らかにし、検証を進めることは、医の倫理の確立やこれからの医学・医療のために不可欠ではないでしょうか。その際、日本の医学界・医療界を代表する日本医学会、日本医師会や関わった学会・大学などが自らの問題として取り組むことは欠かせません。

第 27 回日本医学会総会出展「戦争と医学」展実行委員会は、第 27 回日本医学会総会(2007 年)としての「戦争と医の倫理」の検証の実施を要請しつつ、実行委員会として同総会企画展示会場内の賃貸展示小間における「戦争と医学」ビデオ展示、および別会場での独自の「戦争と医学」パネル展示と国際シンポジウムを実施しました。私たちはこの活動を継承し、第 28 回日本医学会総会(2011 年春、東京)などに向けて、さらに検証に必要な活動を進めます。

戦後 60 年以上が経過し、関係する生存者の証言や当時の資料収集も困難になる中で、検証を進めることが急がれます。史実に基づく客観的な検証のため、医学者・医師はもとより、看護師等の医療関係者、歴史や生命倫理の研究者、法律家等との協力は欠かせません。

また、戦争への加担の歴史を検証することは、国民の各層で行われるべきものですが、医学者・医療人の姿勢が人命に直結するだけに、医学界・医療界が自ら真摯な検証を行い、それを国民に発信することが大切です。国民的な検証に向け、マスコミを含む国民への宣伝・広報活動も必要です。

以上の趣意の活動を進めるために本会を設立します。「戦争と医の倫理」の検証を進める本会の活動が、人間の尊厳や人権を基本としたこれからの医学・医療の発展と「医の倫理」の向上の一助となり、ひいては、日本が戦争のない平和な社会になることに些かなりとも寄与することを心から願うものです。

2009年 9 月 27 日

「戦争と医の倫理」の検証を進める会 設立大会